

湖畔に坐る黒田照子

一 廣島

黒田清輝は広島や宮島のことをずいぶんと賞めている。広島在住の者として耳に快い。

「幸に此辺は景色が中々いゝ、田舎では今切りに稲の穂などをこいだりなんかして居て面白い、殊に尾の道と云処から此方の景色がいゝ」。

これは明治27年11月10日付、「広島市停車場前鶴水館より」の東京・久米桂一郎宛書簡の一節。次も同じく久米宛で、11月19日付、「厳島紅葉谷より」のもの(註)。

「此の宮島の紅葉谷と云処は実にいい処だぜ、名計(なけい)でなく本当の紅葉谷だ、鹿も時々出て来る……今朝となつて真に紅葉谷の妙が現はれた、先づ第一に面を庭先のフォンテーヌで洗ふのだ、此処は是非見て置くべき処だ」。

黒田がなぜ広島へ来たか。日清戦争である。大陸侵略の基地、軍事情政都市広島には大本営があり(同年9月15日、天皇、広島着)従つて日

大井健地

本の首都でもあった時だ。前年6月14日、9年余の長い滞仏生活を終えパリを出発してからの黒田の足どりは落ちつかないものであった。むしろ旅が続いているようなものだ。地名を列挙しておく。パリ↓ニューヨーク↓シカゴ↓バンクーバー↓横浜↓東京(2カ月余静養)↓興津、熱海、京都(1カ月余滞在、《昔語り》の着想を得、《舞妓》他を制作)↓東京↓函館、室蘭、苫小牧、札幌↓東京↓横浜↓鎌倉↓東京↓広島、そして宇品↓大連、金州と続くのである。

パリのル・モンド・イリュストレ社通信員を依頼されたということはあるが、自ら、日清戦争従軍を志願しているのである。

広島発信の出征前の書簡を更に三例、引く。

「僕が戦地へ向ふと云事に為たは従軍して戦の状を写す為とは云ものゝ、其実は只世間に対する僕一人の義務と云所が第一の処だ……つまり、命を大層らしく思居る様に思はれては甚だ迷惑ではないか、何しろ僕は自分のする丈の事をして置けばいゝのだ……愈々戦地へ出るか出ぬかは僕の知た事ぢやない、僕の体は進上して有るのだ」(11

月17日附、京都・中村勝治郎宛)。

「昨日大本營で第二軍への許可を得た。今朝これから宇品の運輸通信長官部とか云処に行て乗船を極めて貰ふのだ。余程世の中がまじめに為て来たよ。残念なのは友達が居ず別れと為て酒飲などして面白くやる事が出来ないのだ。敵島の水絵は合田へ送て置く。己がいきついたら皆への記念物と思へ」(11月28日附、東京・久米桂一郎宛)。

「とうとう立つた仕合の事には宮様と同船で上等と来て居るからすばらしいものさ。ナンダ。戦に行心地ぢやねへ。丸で洋行よ。ア、最後こんな難有目に逢へば先づ本望だナア。そうぢやねへか」(11月30日附、門司港豊橋丸より、東京・久米桂一郎宛)。

これらの書簡に表れた心理をどう読みとるか細心でありたいが、当然のことながらいきつくこと「戦死を一方で想定し、悲愴さを浮薄な調子でまぎらわしている。当時28歳、洋行帰りの黒田の心は、動揺し、精神的な崩れを押しきれないでいた。捨て鉢な、ニヒルな心情に陥っていたのではなかったか。

その理由について、証言がある。

「黒田子爵追懐談話会」の記録より引く。

合田 黒田が日清戦争に従軍した時は非常な決心で行った。自分はあるな家においても不愉快だから、今度は一つどこまでも踏み込んで行つてことよると死ぬかも知れぬという考えらしい。

久米 それはもう不平でたまらなかつたのだ。美術界は無論社会一般のことが不平でたまらなかつたのだ。自分の家の中のことがいけ

なかつたのでしよう。

合田 貴族とか華族とか言つたつてそんなものは詰らないものだ。それより自分のやりたい放題のことをやりたい。己は何もここにいないくても、下宿したつて絵を描いていれば喰うだけのこと位はできるだろうから出ちまう考えた。もう家はやめて了つてもう飛出す考えだといふことを僕に言つた。

パリ時代からの親友、久米や合田清に黒田は率直であつた。合田によれば黒田は父親との確執を示す書簡類に従軍に際して合田に預けたといふ。黒田の一の弟子というべき和田英作は黒田から次のフランス語を記した日記をみせられたといふ。

“Je veux la liberte” (おれは自由がほしい)

戦地に向う黒田を、宇品の波止場で見送つたひとりにフランス人ジョルジュ・ビゴーがいる。黒田の広島滞在をいわば美術史的に興味づけるのはこの偶然の出会いであつた。明治27年11月9日夜、駅前の隣接の宿に泊まつていた。イギリス、グラフィック社の依頼による従軍画家記者がビゴーの仕事だつた。朝鮮などから帰つてきて広島に居たという。「いい話相手だ」と思い、またグループを結成し展覧会を開けば面白からうなどと話したが、先の久米宛書簡に記されている。

のち、黒田執筆の「日本に來遊した外国の画家」でこんなふうに広島以後のことも書いている。

「それから一二年後、汽車の中で偶然逢つたことがある。伊豆の三津

に行くところだと云つて居た。広島で同棲して居た日本の女を女房にして居た。其後たしか明治三十二年頃稲毛の海気館の裏に画室の付いた家を建て、居た頃に逢つたことがある、五歳位の子供が居た、女房は離縁したと云つて居た」。

ビゴアの夫婦生活というか女性関係にも触れるこの記述をする時、黒田はどんな思いだったろう。社会的な束縛の希薄な生活を過ごせたビゴアはひとりの自由人ではあつたらうが、だからその人生が幸せなものになつたかどうかはわからない。

基本的には、東京美術学校西洋画科の授業を囑託されるまで黒田は「放浪生活」者だったことに注目しておきたい。彼はその頃までまだなお、日本に異邦を感じる青春彷徨者であつたのだ。

黒田は17歳でパリに行った。それは囑外の語を借りれば、定見を持たず、処女の官能をもつてのヨーロッパ留学であつた。青年黒田はフランスで自己形成期を過ごし、ヨーロッパ流儀の習慣に染まつた人なのだった。

しかも彼は少年期、ハイカラな養育を受けてもいた。弁当にパンと砂糖を持ってきていたと東京・赤坂、三番小学校の同級生が回顧している。

少年期からも日本の伝統的文化に深くならずむ機会もなく、青年期(ま)において故国を10年近く離れて近代ヨーロッパで自己成長したこの20代の若い西洋画家の眼に、封建的明治の、社会における身分制度、家庭における家父長秩序、恋愛における儒教的禁欲主義といった現実は何のようにうつり、また絵を描く精神にどのように作用したか。

晩年、帝国美術院院長という、画家としては最も荣誉ある地位につき、また政治家として貴族院議員や、宮内省御用掛という役職もこなすことになる。この晩年の「業績」は青春期と対比して整合性のあることなのか。父親と確執していた黒田が、近代洋画の父と呼ばれていることは思えば、おぞましい歴史の皮肉といふべきなのだろうか。

黒田清輝の国家意識、といったテーマも成立する。黒田以上にそのようなテーマが設定しうる適任の画家は存在しないとすら言えよう。

だが大仰なところに飛びだすまい。僕の非力を考えて、その前にまずは小さな地点にたずんでみよう。本稿の目標は「女性」や「家庭」に対する黒田の考えと実際を考えてみることにある。まずは小さなスイートであるべきところ、のちの黒田婦人の坐つた湖畔のあたりに赴こう。

二 年譜

叙述と考察をクリアにするため、やはり年譜を提示する。いちばん最近の信用できる「黒田清輝展」図録所収の年譜(ま)を適記する。「」は僕の加筆。

慶応2年6月29日、鹿児島で生まれる。父島津藩士黒田清兼、母八重子の長男。実母八重子はのち不縁。

明治4年、5歳、伯父清綱（実父の兄）の養子となる。養母貞子に養育される。

明治5年、上京、麴町平河町清綱邸に住む。

明治10年、この頃名を清光に改め、さらにのち清輝と改名。

明治17年2月2日、義兄橋口直右衛門と同行、横浜出港。貞子は水彩

絵具箱を携帯させる。3月18日、パリ着。

明治19年5月、画学に専念する決意を固め、コランの指導に従う。

明治20年6月、養父清綱、華族に列せられ、子爵となる。21歳の清輝

は子爵嗣子として11月29日、従5位に叙せられる。8月、井

上哲次郎の説諭「法律ノ如キハ俗吏ノ業」で10月法律大

学校を退く。この頃、後見人原敬に画学専念の決意披瀝、ま

た帰国した山本芳翠は、佐久間貞一に清綱を説得させる。

明治23年、24歳、5月上旬久米とグレーに遊ぶ。7月中旬、グレー、

オテル・シュヴィヨンから、マリア・ピヨール姉妹の小住宅を

借りて移り25年暮れまでここで制作に励む。

明治24年3月、サロン出品の《読書》が入選。11月10日前後、《婦人

図（厨房）》の制作に着手。12月初旬からパリで東伏見宮依

仁親王の肖像を制作。

明治25年12月25日、グレーを引きあげ、パリに。

明治26年1月14、15日、フランス公使野村靖の居室で《朝妝》に着手。

公使自らモデルを雇った。3月ソシエテ・ナショナル・デ・

ボザールに入選。

6月14日、パリ発、7月30日、横浜着。

明治27年3月15日、参内し天皇に拝謁、天盃を賜わる。同月、貴族院

の依頼により《東久世伯肖像》を描く。

5月19日、義兄、橋口文蔵に伴われ北海道に旅行。

11月10日頃、広島着、11月29日、宇品発、翌年2月15日、帰

京まで日清戦争従軍。

明治28年3月10日、養父の勤める同郷の女性、藤井久子と芝公園の紅

葉館で挙式、暫く京都・松原通大和大路に同居するが、のち

離別する。

4月1日、内国勸業博覧会（7月31日、京都・岡崎町）

に出品の《朝妝》で妙技2等賞。同作品をめぐる裸体画問

題起る。

明治29年1月から《昔語り》構図、画稿、下絵制作。仲居と舞妓には

お栄、三代子、玉葉をモデルとする。

5月14日、東京美術学校西洋画科の授業を囑託される。

6月6日、白馬会発表式挙行。鷗外、樗牛、原敬ら出席。

「8月6日〜11日、小代為重と箱根・石内旅館滞在。」

明治30年2月16日、自宅アトリエにモデルを雇い《智・感・情》の制

作に着手。

「3月4、5日、モデルは小川花の妹こう」、「3月27日、

モデルとして幸」 「4月4日、モデルはお幸」 「4月8日、

モデル花」

8月中、箱根・石内旅館に金子種子（のち夫人・黒田照子）

と滞在。

10月28日、白馬会第2回展に《智・感・情》《避暑（湖畔）》

など17点を出品。

明治31年1月19日、逗子へ行き、はじめ養神亭に、ついで一軒家を求め、8月初旬まで滞在、ここから美術学校へも通勤。

4月28日、高等官6等に叙せられ、東京美術学校教授に任せられる。

8月5日、日光へ移り9月初旬まで滞在、《昔語り》の制作を続ける。

〔8月25日、萬朝報に弊風蕃妾の実例(五十) ▲(四二二) 黒田清輝、掲載〕

明治33年3月31日、文部省から美術に関する制度並びに絵画教授法研究のため、一年間のフランス留学を命ぜられ、5月25日、横浜港発。

8月18日、パリ万博褒賞授与式、《智・感・情》で銀賞。

明治34年5月15日、パリより帰着。

8月7日、貞子、照子とともに箱根へ行き、月末まで滞留。

明治37年7月31日、養母貞子逝去。8月5日葬儀。

明治42年4月11日、養父清綱の80歳の賀筵を上野・常盤華壇で催す

明治43年8月初旬、実弟綱祐水死。

10月18日、帝室技芸員に命ぜられる(洋画家として初)。

明治45年7月28日、〔今夜聖上御容體不容易旨公表セラレタルニ依リ即チ十時半参内セリ 照子ハ萩原君等ト二重橋ニ到リ拜ス〕。

29日、〔夜下婢共ヲ宮城参拜ニ遣ハス〕。

大正元年7月30日、〔嗚呼哀哉 遼ニ崩御遊タル旨告示セラル 午前

八時半参内〕。

8月12日、養父清綱の立像制作着手。

〔父上様御立像ノ下図ヲ始ム〕。

大正2年3月3日、国民美術協会創立総会、会頭に推挙される。

大正4年6月29日、大正天皇撮影に立ち会う(12月29日も)。

大正5年10月19日、コラン没。11月15日訃報を聞く。

大正6年3月23日、養父清綱逝去。4月、爵位を継承する。〔養父没

後のこの年、金子種子を入籍したという〕。

大正7年3月2日、旧作の、照子夫人のバステル肖像画に修正を加え

る。

6月22日、宮内省調度寮囑託を免ぜられ、宮内省御用掛を命

ぜられる。

大正8年5月8日、皇太子御成年式、参内、銀盃1個を授けられる。

5月12日、霞ヶ関離宮での祝宴に列席、銀製菓子器を賜わる。

大正9年3月20日、貴族院議員補欠選挙、子爵議員として当選。

大正11年7月9日、帝国美術院第2代院長。

この年、印度協会会長、麴町区教育会会長にも就任。

大正12年12月2日、宮内省に出勤中、狭心症を起こし、これより臥床。

大正13年7月15日、逝去。特旨をもって従3位勲2等に叙せられ、旭

日重光章を授けられる。7月19日、青山斎場で葬儀、麻布弁

町長谷寺黒田家墓所に埋葬。

三 モデルたち

《構想画》^(注)として歴史風俗画《昔語り》(明治31年、完成図は焼失)は黒田の意欲のこもった野心作であり、無視できないとしても、作品の達成度からは特に秀れているとはいえない(その理由はまさに構想された、作爲的な群像であるからだ)。女性像である、《読書》(明治23—24年)、《厨房》(25年)、《朝妝》(26年)、《舞妓》(26年)、《湖畔》(30年)、《智・感・情》(32年)などを、代表作としてあげるのが順当だろう。《朝妝》は鏡に向かい、《舞妓》には右に「仲居の候補者まめどん」が控えており、さらに《智・感・情》は三幅対の構成となるが、いずれも女性単一像とみることもできる。

モデルに触れてみたい。

《読書》、《厨房》のマリア・ビョー。

一八七〇年11月24日に生まれ、一九六〇年12月27日に淋しく死んでいたこのフランス人女性については綿密な調査がなされている。^(注)

前出の「黒田子爵追懐談話会」では、菊地鈔太郎、和田英作が、「女に恥をかかすのは好くない」と考える黒田の女性観の「美しいデリカシイ」を言う。

「黒田は」グレー村のことは懺悔しない。おかしいよ。人間が非常に固いのだからどうも分らぬ」と、黒田に最も近いところにいた親友久米桂一郎が、ビョーとの関係における黒田をいぶかっている。

「《読書》でビョーが着ている」あの赤い着物はわざわざボン・マル

シエで先生が買ってきたのだ。モデルの好きな型の奴を買ってきてそうして持って行った。(略) 歎心を得るためいろいろなことをやった。それがだんだん昂じて了って三年も四年もいた。その豚屋に」と証言し、ビョーのことを「あの女がプラトニックで置くものか、田舎の多血な大きな女だもの。こっちはプラトニックにしたいが向うはプラティックでいたいんだ」と発言している。

佐野昭が「あの女が千九百年にパリで黒田のアトリエの中で泣いていた。(略)とうとう黒田が金をやって帰してやった」というのに、久米は「夫婦約束位はしているよ」ともいう。

黒田が大橋乙羽の問いに答えて西洋のモデル一般がどういふものかについて紹介しているなかの次のことばなどが思われる。

「時々衣裳でも買って遣るとか、飯なんかも一緒に食ふとか云う事になる、又モデルを妾の様にして居る人もある」。

ビョーの前で青春の黒田は純粹であったし、ビョーとの交渉とその別離が黒田の心に生涯にわたって深いものを残したのも確かであったろう。

《読書》制作時期の黒田日記を見ると、「母宛封書」に次の記載がある。

「……うちのなかでおんながほんをよんでをるところです これハウちのなかのゑですからあめがふつてもかくことができます てほんをやとうげにもばりすとするとよほどおやすうございます……」(明治23年6月19日附)。

7月12日附の書簡にも「わたしがやとつてをりますてほんになるおん

な」「わたしがたのんでほんにしてをるおんな」という表現があり、黒田はビヨールを金で雇ったモデルとして位置づけている。よしんば肉体の關係が既に生起していたにしても、母親に対してはモデル（「てほん」）としてビヨールのことを伝えるのである。7月12日附母宛封書の、よく引用されるビヨール紹介の箇所を引く。

「わたしがたのんでほんにしてをるおんなといふのはとしはまだ十九か二十ぐらいだそうですがせいのかいことまことにふしぎにてほんとうののつぽでございませす わたしハようやくそのおんなのかたのたかさぐらいきりやございませんよ このせいようじんのなかでもちよつとめニたちますからにつぼんニでもいつたらそれこそみせものにもなるだろうとぞんじますよ」。

この紹介の口調からは、内心の真実からいかに乖離が隠されていたとしても、黒田自身、自分とビヨールとの關係が画家とモデル、雇主と被雇者の關係以上に発展しないことを承知していると思われる。いまだ身分社会である祖国日本に妻として連れて帰るといふ想定の起こしえないことは自覚していたと思われる。

《読書》と《厨房》を見比べて僕の感ずることを記せば、《読書》においては、これは（まだ！）モデルを描いた絵である。モデルとして不特定、人体として抽象的な存在である。それはこれまで黒田の描いてきた女性像である《祈禱》（明治22年）、《マンドリンを持つる女》（明治24年）と同じく、何らかのポーズをする女の像である。何らか寓意性を込め、作画的にポーズをさせたモデルを描く。作品意図にモデルは従属す

る。《読書》はモデルをかりて、読書する女を描いている。ところが、これに反し《厨房》は不特定のモデルではなく、じつにマリア・ビヨールその人を描いているのである。黒田が浅からぬ愛を捧げるに至った、「ふしぎ」な「のつぽ」。内に情熱を持つグレーの農村娘。その居るところの環境も含めてのマリア・ビヨールの不断着の肖像画としてよいものである。注文によらない、画家の感興に基く全身の肖像。画家が何かの意図にこしらえて作画したのでなく、描写対象に心を動かされての制作。いってみれば、《厨房》は黒田清輝とマリア・ビヨールの愛情の記念碑である。

しっかりと強い視線で画家を見届けている、あるいはつかまえている成熟した女性であるビヨールの眼、これは《智・感・情》の中央、《感》の女性のいわば宗教的御本尊の真向をみる眼を例外にすれば、黒田の全作品中、他に見られぬ種類の強いまなざしである。

《厨房》には、少なくとも心が通じ、慣れ親しんでいる人故の率直な写実の態度と、初々しい純な愛を捧げている対象の人であるが故の張りつめた気負いとが感じられる。さらに作品に即していえば、部分のデッサンの確だが画面全体は必ずしも円熟した構造的把握ができてはいないがたく、各パートをなんとかつなぎあわせて画面をもたせている印象を僕は持っている。それはおそらく愛情というものの主観性を教唆する。ここではもはや、画家はモデルに対する客観性を捨てているのだから。

先に「不断着の肖像画」といったが、彼女が羽織っているのは黒田の

ものに違いない男性用上着なのである。それは上着の所有者である画家とこの女性がひとつであるという図像的宣言にはかならない。

《朝妝》のモデルについては黒田の談話が残っている。^(註10)

「最初は画題を『トワレット』(化粧)とつけて見たが、どうも面白くないから、『モデル』にした女に相談すると、之は『ルベール』(起る)といふがよからうとのこと、仏国の方では『ルベール』としたのです。ハア、『モデル』になった女子は、普通教育があつて、地方の女学校にゐたのが、或る学生と一処になって墮落をして、そして巴里へ来て手が切れた処から、遂に『モデル』になったのだそうで、一寸思想もあつて、小説の談話位出来る女でした」。

いらざる憶測を附加すれば最後の個所には野の娘ビヨールとの比較があるのかも知れない。

《舞妓》のモデルは京都、繩手の小野亭の舞妓、小あん。よく指摘されることだが西洋人の眼で描かれた日本風俗画の印象がある。ピエール・ロチが日本娘を形容した表現さながら、きれいな小鳥のように、着飾った小さい女。鳥のようなとは人間の扱ではないということだ。ここでは和服の模様の色彩すらも小鳥のようにチラチラとはなまわっている。人体と、それをまとう幾重かの密着した布地という把握ではないと見えるのは、黒田の造形的に徹底していない、脆弱な面がうかがえるように思う。この絵は縦型(縦が横より長い。81・3×68・3cm)だが、オランプピア、ダナエ、横たわるウィーナスなどの西洋図像伝統に則って主役の女性とがしずく側女の横構図に触発された構成とみるのは説得力があ

る。しかし、作為性の希少な点がこの絵の良さである。三輪英夫氏は「景色なり人物なりを見て起る感じを描くというのが黒田の態度」で、

「黒田の《舞妓》は、対象によせる生の感動が制作を促す最も重要な契機となつてゐることを、明確に伝えてくれるのである」^(註11)とする。同感である。この時点ですとえば藤島武二の《桜の美人》(明治25—26年)などと比較するとフランスで学んできた黒田の絵が「いかに革命的なほど斬新」^(註11)であつたか、黒田のまなざしがいかに虚飾なく、清新なものであつたかを痛感するのである。

ここで、黒田の女性観に関係する文献として、「女の顔——私の好きな——」(「大阪毎日新聞」大正5年7月11日)^(註12)を紹介しておきたい。

「クラシックの方でいふ正しい形は、どうも厳格すぎるやうな感じがする。／即ちこれを日本人に應用すると混血児^{あひのこ}になつてしまふ。嫌ひといふではないが絵にするには少し申分がある。眼のパツチリした、鼻の高い、所謂世間で云ふ美人は、どうも固すぎると思ふ。／と云つて又、口元が大変愛嬌があるとか、苦みばしつてゐるとかいふやうな、特に表情の著しい顔は好かない。一口に云ふと、薄ぼんやりした顔が好きです。／眼の細い、生^{はくま}際や肩がキツパリと塗つたやうに濃い顔はいけない。鼻筋の通りすぎたのも却つてよくない。中肉中背といふことも勿論程度問題ではあるが、どちらかといへば、中背は少し高い位、中肉は少し優形の方がいふと思ふ。つまりストラツとした姿の美しい女がいふ。／(中略)一体に東京の女は顎が短くつていけない。尤もあまり長過ぎて困るが、どちらかと云へば少し長い位なのがいい。京

都には、態と表情を殺してゐるやうな女がよくあるが、あれは中々いゝと思ふ」。

最後の個所は、能面のように無表情、と評されることもあった《舞妓》を思わせる。《舞妓》が描かれた明治26年からほぼ四半世紀後の文章であるが美感覚はそれほど変わらぬものであるかどうか。

四 湖畔

ようやく僕らは《湖畔》にたどりつく。

明治30年の夏、箱根・芦の湖々畔である。前年の8月6日から11日まで小代為重と宿泊した石内旅館に今回も滞在している。モデルのちに夫人・黒田照子となる金子種子。

金子種子は「没落士族の娘で花柳界にいたという。長い内縁関係で事実上の夫人となり黒田の養父の没後に入籍した」。

最重要資料の黒田日記の明治30年は5月2日までしかない。31年は年末の2日間のみ。32年1月9日、「お照同道歸京」、10日「又お照ヲ連テ逗子へ引返ス」、1月27日、「母上に種と三人共ニ逗子ヲ引揚グ」などの記載がある。明治34年8月7日、恒例の箱根避暑旅行に8月7日日出発、「同行ハ母上種文と拙者との四人也 母上今年六十五歳 種ハ二十九歳 文姓ハ小泉年十六 拙者ハ三十六歳なり」。こういう記載に會うと、「種」が家族の一員として安定した位置を示めていると思われる（小泉文はお手伝いさんであろう）。

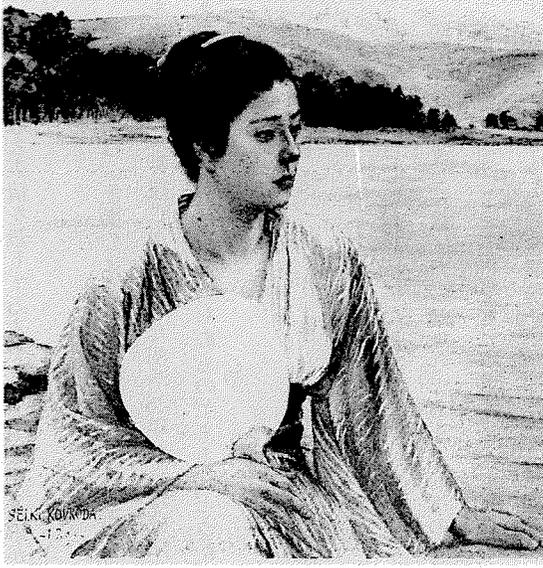
ところで明治31年8月25日の「萬朝報」紙面の「幣風一斑 蕃妾の実例」の欄に黒岩涙香による次の記事が掲載された。

「麴町区平河町六丁目十四番地、子爵黒田清綱嗣子清輝（三十三）は誰れも知る裸体画の大熱心家なるが、彼れは裸体画の好模型を求むるを口実とし数次柳橋に遊び、ついに元柳町三十番地の芸妓山田屋おたかの妹照子こと乾さく（十八）といえる美人を選みて落籍させ、昼夜の別もなく裸体の儘に傍に引附けいたるが、漸くにして一個の裸体画を作り上げこれを白馬会に出品せり。しかしてさくは今尚妾として相州逗子の別荘に置かる」。

18歳の「乾さく」という別の女性がいたか、それとも涙香の調査不足か。時期的には、照子こと金子種子（明治31年当時は26歳）がふさわしい。

白馬会出品の裸体画ということでは、明治30年10月28日—11月5日の第2回白馬会出品の《智・感・情》のこととなる。《智・感・情》のモデルは黒田日記によれば、小川花とその妹・幸という名が挙げられる。《智・感・情》制作時期の明治30年2月16日から5月2日までの間に、幾度か夜食を「赤阪の金子」でとっており、また4月12日「美術学校の乾氏」という名が挙げられる。37年10月15日、26日にも記載がある。関係する人かどうか）。

白洲正子氏の父君は樺山愛輔であり、愛輔は黒田清輝と従兄弟になり、家も近く交友は深かった。《読書》、《湖畔》は樺山愛輔の旧蔵品であり、邸の食堂と客間にかかっていた。白洲氏に次の文がある。



湖 畔

「『湖畔』の」モデルになった人のことを、私たちは『おてるさん』と呼んでいた。後には黒田夫人と呼ばれるようになったが、私の知る範囲では、彼女はいつも蔭の人だった。家へ連れて来られることは一度もなかったし、黒田さんは（少なくとも表向きは）独身のようふるまっていた。そういう点では、おてるさんもずいぶん辛い思いをされたに違いない。事情はよく知らないけれども、女性関係において、あまり幸福でなかったことが、このような傑作を生んだのであろう。有名な『智・情・感』の連作も、彼女がモデルになったと聞いている^(注15)。

《智・情・感》は理想化された姿態の裸体像であり、モデルの写実的描写とはいえないので、モデル詮議は難しいといえるが、照子こと種子

の投影の可能性はないとはいえない。《智・情・感》を論ずるのは別の機会にして、ここで《湖畔》を見ておく。

《湖畔》は油彩画による日本の情趣の表現といえる。黒田にとってこれは日本回帰ではない。団扇を持った納涼美人図という伝統的題材に彼も共感する感性に進出していった。《舞妓》の時のような西洋人ふうの眼でなくなる。バタ臭くない。動勢のなかの緊張が解け、滞るところなく、単純にさわやかできれいな絵なのである。広々とすがすがしい。見る人に抵抗や嫌悪感を与える要素の何ひとつない、ひっかかるところのない誠に健全な絵。これはつまり俗受けする絵なのである。

たとえば遠景の山なみの描写はまるで水彩のように浅い塗りで、ち密なものではない。むしろ装飾的ですからある。湖水の水面はわずかの色調の中で調子をとって面をもたしている。人物の後ろにのぞく岸辺の岩は凡俗な描写で、しかしこのような描写がのちのちまで官展を中心に日本の油彩画の主流となるものである。

すがすがしく、さわやかな情趣、この情趣の表現のために、絵画が他に備えてよいはずの主張めいたものは一切ないのである。日本の情趣の型に全てをはめこんでしまう。思いつめたところはまるでないのである。日本人の油絵として本作品のようなのを第一としてよいのであろうか。だが黒田においては日本の西洋画とはこういうものである。無理のない、自然らしさに黒田の良さがあることはできるだろう。

隈元謙次郎の問いに照子夫人は次のように制作模様を答えたという。「良人が湖畔で制作しているのを見に行きますと、其処の石に腰かけ

てみてくれと申しますので、そう致しますと、よし明日からそれを勉強するぞと申しました。(略) 下絵も何にもなく、ぶつつけにカンヴァスに描き始めました。雨や霧の日があつて、結局一か月ぐらいいかりました^(註16)。

彫りの深い、エキゾチックな顔立ち、と《湖畔》のモデル、照子夫人を評していることが多いが、そのような女性をモデルとし、同居し、夫



黒田清輝《婦人肖像》木炭デッサン、1898(明治31)年1月。年譜の1月19日の条参照。おそらく照子と逗子に住みはじめた頃の作と思われる。

人としたことに黒田の美意識の発動があつたらう。挿図の《婦人肖像》の照子夫人は、初々しく、黒田のこの女性から得た新鮮な感動は疑えない。

白洲氏は先に引いた文の末尾に「しよせん黒田さんは一人の女しか描けない画家だったのではあるまいか。初恋の体験が、深刻にすぎたため

か、もしくはまた、女性を愛するあまり、一種の女嫌いとなり、それで結婚することができなかったのかも知れない。それは誰にもわからないことである^(註17)」と記す。また、やはり先に引いた陰里氏もこう記している。「友人たちによると黒田は女性と子供に関しては全くフランス風な態度で対処したという。フランスといっても一種類ではないであろうから真相は藪の中というほかない。(略) 黒田の最大の不幸は盛時に幸福な家



明治31年1月24日、逗子より東京・久米桂一郎に宛てた書簡の挿図。「こんな体裁の暮らしをやつて居る」と書簡本文にあり、図中に「昨日から雨風で外へ出る事が出来な手紙でもかくべエ」とある。右から黒田、照子、養母貞子。血のつながらぬ3人であるが、水入らずの3人家族の光景と思わせる。

庭をつくりえなかつたことである。女性に対してはフランス風であると同時に臆病であつたのであろう。その遠因はグレー村時代にあるのかも知れない^(註18)。

これらの文に僕は、《婦人肖像》の描かれた頃である明治31年1月24日附の久米桂一郎宛書簡中の挿図を照らしてみれば、存外、黒田の結

婚生活、家庭生活というものも実のある、しみじみした良き生活であった、そういう一面もないわけでもないと思えるのだ。そのことは画業の全体からみればひとつの挫折者であったと思える黒田のために心なごむことなのだ。

五 公使の令嬢

最後に唐突に一資料を掲げておく。蕪雑な本稿のどんでん返しを企てるみたいなのだが。

『漱石全集第十三巻、日記及断片』（昭和41年、岩波書店）百三十三ページに、気になる二行がある（断片 明治三十七・八年頃）。

「○黒田清暉曰ク先日支那公使館へ行つたら公使ノ令嬢が僕ニLoveシテ居タラシイガ不幸ニシテ言語ガ通ジナイノデ分ラナカッタ、秘密ヲ守ル信用ノ出来ル通辯ガ居ルナラ周旋シテクレ」（注解に「暉」は「輝」の書き誤り、とある）。

これはいったい、何だろう。

独身者を気どる黒田、しだいに清濁あわせ飲むタイプに変貌した黒田はラブ・アフエアにおいて狡猾でもありえただろう。

注

注1 以下、書簡は「『光風』蹄の痕 所収書簡」。黒田清輝『絵画の

将来』（陰里鉄郎編 昭和58年中央公論美術出版）より引用。

注2 「国民美術」大正13年9月。『絵画の将来』所収。

注3 黒田清輝と広島との関わりについて今ひとつ言及したい。大正元年12月23日から28日まで、神戸・川崎造船所から依頼された《敵島図》のため神戸、京都に旅行している。12月22日、敵島に関する古書を見、31日、敵島の絵図を模写、1月5日より画布に敵島の古図を復写、制作、12日、大体の着色を了え、13日、ひととおり完成、同図を携行して神戸へ向かっている。日記の記述によれば敵島現地には行かなかつたようである。

注4 「美術月報」大正9年3月。『絵画の将来』所収。

注5 例えば、黒田35歳の明治34年8月16日の日記（注7、参照）に、芦の湖の湖水に「お聖霊様」を流すという宗教行事を目撃して、「佛教的習慣を心得ざる拙者にハ何れかの外國の人の仕業を見るが如きの感有り」と記している。

注6 「生誕二〇〇年記念 黒田清輝展」の図録所収の「黒田清輝年譜」。三輪英夫編「黒田清輝年譜」（《黒田清輝素描集》）を転載、加筆したもの。同展は一九八六年5月10日―6月8日、三重県立美術館で開催。以降、高岡市立美術館、東京都庭園美術館、熊本県立美術館を巡回。

注7 『黒田清輝日記』全4巻（隈元謙次郎編 昭和41―43年中央公論美術出版）記載の黒田原文による。以下、*で示した。

注8 高階秀爾「黒田清輝と『構想画』」、『近代画説』第一号、明治

美術学会、平成4年11月、参照。

注9 平川祐弘「黒田清輝のモデル、マリア」、「文学界」昭和56年5月号。なお、芳賀徹「グレーの哀歎―黒田清輝の場合」、『絵画の領分』、朝日選書、平成2年10月、も参照。

注10 「名家歴訪録」明治34年。『絵画の将来』所収。

注11 三輪英夫「名作の誕生《舞妓》——古都発見の新鮮な驚き」、『アート・ギャラリー・ジャパン 20世紀日本の美術 第11巻』、集英社、昭和62年5月。

注12 「女の顔——私の好きな——」、「絵画の将来』所収。

注13 陰里鉄郎「黒田清輝が描いたパリの恋人、日本の愛人」、「芸術新潮」昭和60年9月号。

注14 黒岩涙香『幣風一斑 蕃妾の実例』、現代教養文庫、平成4年6月。

注15 白洲正子「黒田清輝の女人像」、「縁あって」、青土社、昭和57年。

注16 隈元謙次郎他『現代日本美術全集16』、集英社、昭和48年3月。

注17 白洲正子（注15）に同じ。陰里鉄郎（注13）に同じ。